

第七節 長崎司藥場と長崎病院

長崎司藥場においては、明治九年八月十二日、創設以來、医制及び司藥場章程に従つて藥品の検査、取締及び藥舗売買等を管理したが、同時に藥舗見習などの講習も行つていたのである。これについては別に述べたところもあるが、長崎病院と長崎司藥場とはこの講習に關して援助し合うところがあった。司藥場の整備が進み、明治十年九月には長崎司藥場の講堂が略々完成したので、長崎病院医学場の生徒がこの講堂の落成後にはそこで講習時間を持ちたい旨、長崎医学場長吉田健康より長崎県に宛てて伺ひ出していた。ところが医学場の管理をなしていた病院は長崎県第一課に属していたので、直ちに司藥場を管理する内務省五等出仕前田献吉に宛てて伺出た。これに對して、前田献吉は九月二十五日に長崎県に對し、講堂落成後の十月一日以後、長崎病院医学場生徒の講習時間中使用させてもよい旨及び長崎病院の外国人病院と

試験場の中間の通路は都合の悪いこともあるので、場所を移転すべきで、その費用は司藥場が弁償する予定である旨を伝えた（戊第三十号）。これを二十六日に受取つた県第一課では、翌二十七日、この件を決議し、長崎病院及び前田献吉に宛てて達及び回答を与えた。長崎病院に對する達は庶第八一二号を以て長崎医学場長宛とされ、内容は長崎司藥場は（兼ねて契約しておいたところ、今度）講堂落成につき、来る十月一日以降は、医学生徒の講習時間に使用して差支えない旨の通知があったから、この件はそのつもりでいるようにと云うのである。又、前田献吉に對する回答の内容は、司藥場講堂落成の十月一日以降はかねて契約していた通り、病院生徒の講習時間使用許可の件を了承し、且つ病院の外国人病室と試験場の間の通路移転の件については、七月二十一日付で回答した通り、着工次第、県庁から出張して引渡すことを

第七節 長崎司薬場と長崎病院

取計る手筈で、日限を定められたら、又、申越されたい旨を回答した。

然し、長崎港よりの輸入薬品が漸次減少したので、明治十四年七月二十二日、内務省達甲第六号により、長崎司薬場を廃し、その人員及び予算を大阪その他の司薬場に移した。

長崎医学学校才十二敷地建物略図

明治十五年現在

